第1問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。

Aまるごと(whole)と全体(total)とを区別して考えたい。

明治のはじめには、手ばやくつよい国家をつくるために、集団として型にはめこむ教育が、小学校だけでなく、中学校、高等学校、大学に必要となった。この場合、教師は集団として養成され、教師用の教科書（マニュアル）をもって、おなじ教科書（これは生徒用）を使って集団としての生徒に対する。授業は規格化され、（ア）サイテンもおなじ規準によってなされる。生徒は、おちこぼれるものを別として均質化される。近代都市に鉄筋コンクリートの高層の建物がたちならぶように、その都市の形と相似た均質化が教育においても進行する。集団としての生徒の数学における、あるいは英語における達成度は、規格によってはかることができるようになり、ここにひとりの生徒がいると、その生徒の位置は、達成度によって同年齢のものの中のこのくらいのものと確定することができる。それは全体(total)の中での位置づけである。

まるごとというのは、そのひとの手も足も、いやその指のひとつひとつ、においをかぎとる力とか、天気をよみとる力とか、皮膚であつさ、さむさ、しめりぐあいをとらえる力とか、からだの各部分と五感に、そしてそのひと特有の記憶のつみかさなりがともにはたらいて、状況ととりくむことを指す。その人のこれまでにうけた傷の記憶が、目前のものごとのうけとりかたを深めたり、ゆがめたり、さけたりすることを含む。

プラトンは、知識の体系をつくったとは言え、今の日本の子どもよりも、先史時代の人に近かったから、においを手がかりとして記憶がたぐりよせられることがわかっていた。二〇世紀の人間としては、シオドーラ・クローバーの書いた『イシ』という伝記は、それまでヨーロッパ・アメリカの白人文明にふれないで生きていた先住アメリカ人イシが、同族が死にたえてから意を決してひとりで白人の前に姿をあらわしたあとで、彼に会った文化人類学者アルフレッド・クローバーと言語学者エドワード・サピアの研究記録をもとにして、書かれた書物である。ここには、クローバー、サピア、クローバー夫人の（イ）ケイイをとおして、実践的知性の人イシがあらわれる。

科学技術の進歩と、その科学技術の使われ方を混同して、文明と定義し、その文明をそれ以外の仕方で人間が生きる道よりも高いものとみなす考え方への（ウ）リュウホをせまる一個の証言である。

イシとクローバーの出会いには、偶然の幸運がはたらいている。イシにはひとりになって生きてゆくために、新しい人たちと出会う個人的必要があった。クローバーの側には、文化人類学の知識のたくわえによって、先住アメリカ人の知恵についての（イ）ケイイがあり、イシと出会ったときにこの個人の並はずれた人がらにおどろくだけの直感があった。両者の出会いには、神機とも言うべきものがはたらいた。幸田露伴が母のない娘に性教育のいとぐちをあたえたときのB啐啄（そったく）である。それは、娘が近所の子とおなじく、道にゴム製品をひろって風船のようにふくらまして遊んでいるのを禁じて、よく見よ、と言って男女の気配を感じることへの道をひらく、幸田露伴から幸田文へのバトンの受けわたしである。大量生産の時代の教育の退廃を批判したポール・グッドマンの言葉におきかえると、偶発性教育の実現である。偶然性を見てとり、そのきっかけを生かすのは、親にとってむずかしく、教師にとってはさらにむずかしい。ひとりひとりの生命のむかえるその大切なときを、五〇人を受けもつ教師がどうして見わ

けることができるか、しかし、むずかしいであろうという自覚をもつことは、教師にもできるのではないか。

C偶発性のきっかけを見逃してゆく教育にたいして、そういう見逃しをよろこんでうけいれる道もありうる。それは、戦前・戦中においては国民生活の指導者になることを約束する青年団も軍隊も在郷軍人会もなくなった今日では、入学過程で成功する道であり、企業に同化する道である。

D加藤典洋は、語り口を重要視する。現在には現在の語り口があるはずだ。現在の語り口で前の時代のことを語りなおし、しかも、仲間内の語り口におわらず、仲間を一歩はなれたところから見ることのできる公共の語り口へふみだすことを、ハンナ・アーレントのアイヒマン報道にふれて、彼はすすめる。迫害されたユダヤ人の歴史を、迫害されたユダヤ人の語り口からはなれた語り口で語りなおすところから、公共性にむかってふみだす方向である。

敗戦後の日本の権力批判の政治運動は、すぐ前の時代に彼ら自身のすすめた軍国主義の運動とよく似た語り口をとった。

戦後の民主主義運動家の語り口は戦中の軍国主義運動の語り口と似ていた。高度成長時代の大学の学生運動家の語り口は、彼らが右翼よりの立場にかわってテレビの評論家となっても、やはり学生運動指導者だったころとおなじく、民衆をしかりつける語り口をかえてはいない。彼らは、学生運動家であったころとおなじく、いまもクローン人間をつくりたい。鉄筋コンクリートで区画された均質空間へのさけがたいあこがれがある。それは、ながい学校生活をとおして、成績上位でとおしたものの優越感であり、その優越の故に、右であれ、左であれ、どのような立場にたとうと彼らは、指導者の位置にいる資格をもつと信じている。小学校、中学校、高等学校と、ちがう教師につねにすばやく（エ）ジュンノウし、入学試験にさいして、ただひとつの正しい答をつねに正確に読みとる能力を活用して、手本をかえても、つねにそのすばやい学習によって支配的でありうる身ぶりである。大正デモクラシーから昭和の軍国時代に、美濃部達吉の憲法解釈に習熟して高文(高等文官試験)に合格したものが、おなじ集団ぐるみ、昭和軍国時代にはナチスばりの法学を適用する立場にかわって民衆にのぞんだのだが、それらの語り口は、敗戦をとおっても、高度成長をとおってもかわっているようには私には感じられない。そこには、全体をひきいる教育思想がかわらずに流れており、その思想は、自分まるごとの私的信念と私的態度によってささえられているようには思えない。

（中略）

「まるごと」と「全体」について、日本の英語教育の歴史から例をあげよう。一四歳の漁師万次郎たちが難破して無人島でくらし、アメリカの船に出会ったとき、英語を知らない万次郎たちはからだの力、心の力をかたむけて、異人に自分たちの状況をつたえ、空腹をうったえた。そのうったえはとどいた。ここにはまずコミュニケーションがあって、それから英語がある。日本人の誰もが、まずコミュニケーションがあって次に日本語をまなんだ。明治から百年余りの学校教育はこの順序を転倒させて、まず英語があってそれから外国人とのコミュニケーションがあり得ると考え、その考えにもとづいての学校での英語教育は百年にわたって失敗した。この百年間、中学校、高等学校、大学の教育は、英語からコミュニケーションに転じる道をつくりださず、この期間に英語は数学とならんで、入学試験でのおとす道具として使われる役を主にないつづけた。これほどの長期にわたる失敗を、他の国の同時代史に見ることができるだろうか。その失敗の自覚が、敗戦と占領をへても日本にいまだにない。ながいあいだつづ

いた大きなあやまちをしっかりと見ることはむずかしい。

均質集団としての「全体」から区別される「まるごと」を、宮本常一のつたえる村の生活のひとこまとして見ることができる。ある日子どもがひとり見えなくなった。そのとき村の人たちはあつまって分担をきめることなく、ばらばらに自分の得手の方向に散って子どもをさがした。やがてひとりが近くの山のお寺まで行って子どもをつれてきた。そのおとなは、その子がときどき山のお寺に行って自分ひとりの時間をすごすくせのあることを知っていたのだそうだ。そのさわぎのなかで、まったく働かなかったのは、その村によそものとして移ってきていた知識人だったという。彼には、自分のE得手の領域がなかった。村の歴史のこのひとこまでは、村という集団が全体ではなく、まるごととして動いた。

（中略）

教育は、連続する過程であり、相互にのりいれをする作業である。教える—教えられる、そだつ—そだてられるは、同時におこり、そして一回でおわるのでなく、その相互作用はつづいていく。

小学校一年生の最初の一時間におこったことを、ある人が晩年まで考えつづけた。算術の時間のはじまりに先生が黒板に白墨でまるを書いた。紙がくばられて、みんながおなじものを書くように言われた。「できた人」ときくと四〇人のほとんどが手をあげたが、ひとり手をあげない子がいた。先生はその子のそばに行ってだまって見ていて、感心していた。その子の仕事が終わるまで待って、「〇〇君はこういうまるを書きました」と言って彼の書いた紙をみんなに見せた。そこには黒のべたぬりの上に白いまるがぬいてあった。

じっと立って感心していたとき、先生は何を考えていたのだろうと、老人になった昔の一年生は考えた。抽象にはいろいろあるのだな、と数学的に考えたのではないか。ただまるを写せといっても、いろいろな方法があるのだ。自分の中に、自分の出した問題がいくつもの問題にわかれてあらわれ、それらにたいするいくつもの答がこのとき浮かんだのだろう。もしこのとき、「早く早く」「まだできないの」「こんなまるを書いて」「これはまちがい」と先生が言ったらどうだっただろうと。

現在の学校教育に姿の見えなくなった、まちがいをいかす方法、選択をいかす方法について書いた。そのはてには、まちがいとえらびとがともに姿を没する、もうろくと死がある。その場所で、教育は教育の不可能性と対面し、人間にとっても、個人にとっても、どうしようもなさ(récalcitrance)とむきあう。こわれてゆく生物が石と火と大気のつながりをとりもどし、そこにかえってゆく。そこまでを教育の眼にいれておきたい。

ということは、教育が、その有効な期間のさなかにあってさえも、人間性のきずつきやすさ(ヴァルネラビリティー)と表裏一体のものとして成長を見る眼が必要だということとだいたいおなじ見方となる。くりかえしになるが、正しいことの上に正しいことをつみかさねることによっては、わずかの正しさを実現することさえむずかしい。

おわりに定義をこころみよう。教育は、それぞれの文化の中で生き方をつたえるこころみである。それは、あたらしく生まれてくるものにとっては、まえからくらしている仲間をまねることからはじまる。しかし、もっとよく見れば、まねることの基礎に、それを可能にする、自分のはたらきがある。呼吸するというようなことは、他人からならう前からそれぞれの個人にある。もうひとつ。教えようとおとながこころみるときに、相手の失敗、抵抗、逸脱などから、自分の生き方への思いなおしのいとぐちを見つけることがある。それが、教育が連続する過程であるということであり、教える—教えられるという相互的な過程であるということだ。ここではじめの言い方に限定をつけなければならない。教育は生き方をつたえるこころみと書いたが、論証の矛盾なく言いおおせるためには、生き方の中にあるものとして死に方を強引にひっくるめてしまい、死に方をもまなぶことでもあり、くずれてゆく過程でもあると言いたい。

私の言いたいことは、今の日本は学校にとらわれすぎているということ。学校がなくても教育はおこなわれてきたし、これからもおこなわれるだろう。学校の番人である教師自身がそのことを心の底におけば、学校はいくらかは変わる。

（鶴見俊輔『教育再定義への試み』一部改変）

問1　傍線部（ア）～（エ）の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 4

1

（ア）サイテン

① シキサイ感覚が豊かな人が、芸術家になれる。
② 彼がサイカクを表したのは、社会に出てからである。
③ ヤサイを食べない人が増えている。
④ 議会でサイケツをとる。
⑤ 雨で運動会のカイサイが危ぶまれている。

2

（イ）ケイイ

① 弁護士が、裁判所でこの犯罪のケイイを説明する予定だ。
② キケイにおかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
③ 現代人は自然に対するイケイの念を欠いている。
④ 痴漢防止をケイハツするポスターを描いた。
⑤ それは私にとって、ケイイな問題にすぎない。

3

（ウ）リュウホ

① アメリカへのリュウガクが決まった。
② この病気の原因は、ケツリュウが悪くなったことにある。
③ この寺は平安時代にコンリュウされた。
④ 筋肉のわずかなリュウキが見られた。
⑤ 微細なリュウシが空気中に漂っている。

4

（エ）ジュンノウ

① 他人のハンノウを見ながら話すべきだ。
② ファイルをサーバーにカクノウした。
③ 作家の描くノウミツな人間関係が評判になった。
④ 宗教における信仰とセンノウの問題を扱った論文を読んだ。
⑤ 人にとって、ボンノウを捨て去ることは難しい。

問2 傍線部A「まるごと(whole)」と「全体(total)」の具体例の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5

① 「まるごと」：先住アメリカ人の知恵、明治時代の教育　「全体」：万次郎と外国人のコミュニケーション、学校での英語教育
② 「まるごと」：においを手がかりとした記憶、先住アメリカ人の知恵　「全体」：明治時代の教育、村人たちの行方不明者の捜索
③ 「まるごと」：万次郎と外国人のコミュニケーション、学校での英語教育　「全体」：先住アメリカ人の知恵、学校での英語教育
④ 「まるごと」：においを手がかりとした記憶、万次郎と外国人のコミュニケーション　「全体」：明治時代の教育、戦後の学生運動の指導者
⑤ 「まるごと」：学校での英語教育、戦後の学生運動の指導者　「全体」：万次郎と外国人のコミュニケーション、村人たちの行方不明者の捜索

問3 傍線部B「啐啄（そったく）」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6

① 獅子が子を生むと谷底に突き落とし、生き残った子どもだけを育てること
② 卵の中のひなが内側からつつくのと親鳥が外側から卵をわるのが一致すること
③ カッコウが自分で巣を作らず、他の鳥の巣に卵を産み、子育てを任せること
④ 犬が、子どもが赤ん坊の時は良き守り手となり、幼い時は良き遊び相手となり、少年期には良き理解者となること
⑤ 白鳥たちが、生涯ただ一羽の伴侶と共に過ごし、巣作りから雛が独り立ちするまで、常に二羽で協力し合うこと

問4　傍線部C「偶発性のきっかけを見逃してゆく教育」として最も不適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7

① 入学試験に成功するための方法を学ぶこと
② 英語を話せるようになるために文法から学ぶこと
③ 将来の安定した生活を送るために必要なことを学ぶこと
④ 国家の礎になるために学ぶこと
⑤ 目の前の子ども達と接するための方法を学ぶこと

問5　傍線部Dについて、加藤典洋が重要視する語り口の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8

① 水俣病の被害者の立場に立って、公害問題を語ること
② 既知の友人に対しても丁寧に物事を説明すること
③ 太平洋戦争中の兵士たちの体験を現代の社会の問題と関連づけて話すこと
④ 原発事故を経験していない人にも、当時の状況がわかるように話すこと
⑤ ユダヤ人迫害の歴史を加害者側の立場から語ること

問6　傍線部E「得手」の反意語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9

① 非得手
② 不得手
③ 反得手
④ 無得手
⑤ 未得手

問7　本文中の筆者の見解に最も近い内容のものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10

① 日本の戦前、戦後の社会には、共通する部分が多い。
② 日本の社会と教育は、強い国家づくりを目指した明治期から、戦争を経て、大きく変わってきた。
③ 数学の正解は一つであり、その正解を導くためには、正しい計算方法を学ばなければならない。
④ 教育には様々な役割があるが、そのなかで最も重要なものは、それぞれの文化を伝えていくことである。
⑤ 正しいことを実現するためには、少しずつ正しいことを積み上げていく必要がある。

第2問　次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。

「A異界」とは自分たちの「生活世界」の向こう側の世界のことである。では、民俗社会にとってどのような意味をもった領域なのであろうか。それは別の世界、時間的にであれ、空間的にであれ、民俗社会の人々が誕生してから死ぬまでの生活を過ごす日常生活の場所と時間の外側にある世界のすべてが意味されている。すなわち、時間的にいえば、誕生以前と死後の世界、空間的には村落社会の外に広がる領域がいずれも異界といえるわけである。

しかし、実際にはこうした二種類の異界は相互に関連し合ったり、重なったりしている。たとえば、西方の彼方にある浄土はまた、死後に善人がB赴く浄土である。一方、異界には、観念の世界にのみ存在するものと地上に実際に存在する空間として表象されるものとの、二つのタイプがある。前者は、黄泉国、常世国、極楽浄土と地獄、ニライカナイのような異界であって、この世に生ある限りそこへの往来はできず、したがって、肉体を運んで見ることの不可能な世界である。民俗社会の人々は総じてこうした異界についてあまり想像力を働かせておらず、異界描写はきわめて乏しい。これに対して、後者の異界（地上の異界）は、この世と（ア）カクゼツした世界ではなく、その気になれば行くことも見ることもできる地上の一定の空間領域、山とか海とか川、湖沼、村はずれや境、辻、といった空間であり、民俗社会の人々のコスモロジーのなかでもきわめて重要な意味を帯びている。（中略）

a（　　）異界は、こうしたb（　　）異界を介して、つまりそこに世界を投影することによって意味をもち、またc（　　）異界はd（　　）異界を背後にもつことによって存在しているのである。したがって、e（　　）異界はこの世のなかにある異界、この世とf（　　）異界とを仲介する領域といえる。たとえば、京都の朱雀門や戻橋は、大内裏の内と外、京の内と外を区別するとともに、鬼の世界への境界でもあった。つまり、地上的異界は、この世の周辺部であるとともに観念的異界の周辺部（出入口）でもあるのだ。

「妖怪」や「魔」が人々の前に立ち現れ、立ち去ってゆくのがこうした地上の異界であり、また人々が「妖怪」や「魔」に出会うのもこうした異界であることが多い。もっとも、社会の周辺部、地上の異界は、ある程度、私たちの考える物理的空間の遠さに対応しているが、（イ）ジュンスイな意味での空間的遠さではない。それは民俗社会の人々の認識のさまざまな位相に応じて変化する。

たとえば、家の内部に目を向けた場合、日常生活を営む炉辺が「この世」＝人間の領域であるのに対して、便所や神の間、座敷、納戸、蔵などは非日常的な領域＝「あの世」との境界として把握される。その結果、便所に幽霊が現れたり、座敷にザシキワラシが出たり、蔵にクラボッコが出たりするわけである。

家の内部から家の内と外の対立に目を移すと、家の内側が「この世」であり、家の外側が「異界」となる。こうした観念をよく示しているのが、雨

だれ落ちを賽の河原とみなす民俗である。山や原野からやって来る「アマノジャク」や「一つ目小僧」は、軒下まで侵入し、家のなかをのぞいて人々の様子をうかがう。家の内と外の区別は、門の内と外という具合に把握されることもある。地方によっては、そうした境界であることのしるしを、「魔」や「妖怪」の侵入を防ぐ目的をもつ注連縄で作り出す。

さらに、橋や辻、峠といった所も、橋姫の祠、道祖神、地蔵といった神や仏を祀っていることからもわかるように、顔を見知った人々の住む里と未知の空間＝異国とを区別する場所で、「ひだる神」や「七人みさき」のような怨霊や「産女」のような女の妖怪が出没するとされていた。

山や海、川は、こうした異界認識の諸位相のなかでももっとも高次元の位相をなしている。山や海や川は、観念上の異界と人間の住む現世との境界にあたっており、物理的にも人々から遠く隔てられているため、数多くの「妖怪」や「魔」が隠れ棲んでいた。鬼、天狗、海坊主、カッパ（水虎）、竜、磯女、その他の動・植物が年を経て妖怪化したもの、等々、その種目は多い。

さらに注意すべきは、こうした空間的な領域は、昼と夜の対立・交替とも結びついていることであろう。すなわち、昼間は明るいために姿を見せなかった「妖怪」が、夜になると闇にまぎれて出没するのである。昼は日常的世界であった空間が、夜になると非日常的な異界、妖怪空間となるわけである。要するに、民俗社会の「妖怪」や「魔」は、現世と異界の仲介領域に出没したり、棲みついたりしている。そして人間社会の内部で生じた人間の変身したものである「妖怪」も、こういった領域へ立ち去ったり、追放されたりすることで「妖怪」や「魔」として存在し続けるのであり、天界や地下界、地獄といった異界に生まれ棲む「妖怪」や「魔」がまず出現するのも、こういった場所である。

青森県下北半島で採集した子守り唄に「寝ろぢゃ寝ろぢゃ寝ろぢゃよ、寝ねば山からモコ来るぞ、モコ来て取てたらどうするぞ」というのがある。これと同様の東北地方の子守り唄としてたとえば「泣けば山からモウコ来る、泣けば里から鬼来るァね」というのも報告されている。ここで歌われている「モコ」とか「モウコ」は、柳田国男が整理した「モウ」「モモンガー」などと同系統の妖怪の（ウ）ソウショウであって得体の知れない「妖怪」の類をさしている。おそらく、古代の「もののけ」をいう語が転訛したものであろう。それが山からやって来て泣く子をたべると脅かし、泣きやませ寝かしつけようとしていうわけで、山の異界性＝異界空間性をよく語り示している事例といえるであろう。

（中略）

ところで、境界的空間領域としての異界と妖怪の関連とともに考慮しておくべきことは、人々が抱くコスモロジーにおける人間のカテゴリーである。それは自分を中心として同心円的な世界像を示している。山口昌男は、この点を次のように述べている。

中心は勿論円心と重なる「私」であり、この「私」は「彼」、「我々」に対する「彼ら」、「この世界」に対する「彼方の世界」という外で意識化される円周及びその彼方の部分に対置する形で、世界の像を描く。この円周の部分に現われる「彼ら」は他者の原像を提供する。とはいえ、円周

は流動的であり、拡大したり、縮小したりするから、「内」と「外」という観念は決して固定的なものではない。

山口が説くように、民俗社会の人々の宇宙論における人間の分類は、同心円的であり、流動的である。状況に応じて、その「私」（「我々」）と「彼」（「彼ら」）、あるいは「内の人」と「外の人」は多様に変化する。

このC対立は、あるときは、ハルヤマノカスミオトコとアキヤマノシタビオトコ、コノハナサクヤヒメとイワナガヒメのように、兄弟姉妹間の対立として現れ、またあるときは、紫の上や六条御息所のように、一人の夫をめぐる妻たちの対立として現れる。こうした対立は家の内部の人間関係における対立で、説話の記述者たちは、前者を「内の人」、後者を「外の人」として把握している。というのは、後者の人々は社会の秩序道徳を犯した邪悪な人々であり、妖怪や鬼に変身した人として扱っているからである。これらの事例は、家族や親族の内部にも潜在的な〈他者〉がいることを暗示している。

また、このような「内」と「外」の対立は、「男」と「女」の対立としても示される。男は公的な場で活動し、権力を握っているのに対し、女は権力の領域から排除されて私的領域に閉じ込められている。また、女は出産という表象を通じて異界と結びつき、また月経という表象を通じて自然の領域、穢（けが）れの観念と結びつけられてきた。したがって、男に支配され抑圧される側の女は、男に比べて怨念を抱きやすい構造的位置、つまり〈他者〉＝妖怪に転化しやすい位置を占めている。たとえば「道成寺」の清姫や『磯崎』の前妻、『平家物語』「剣の巻」の橋姫といった形象は、こうした文化における女の潜在的な〈他者性〉を語っているものであろう。民俗社会の「妖怪」において、山姥や雪女、磯女、産女といったイメージのほうが、男のイメージよりも恐怖感が強いのも、そうした〈他者性〉と関係しているのではなかろうか。また、男の「生霊」よりも女の「生霊」のほうが、また男の邪悪な感情によって発動する「憑（つ）きもの」よりも女のそれのほうが数多く発生し（エ）シンコクである、という事実もこれを語り示している。

さらに、「生活社会」という位相の内部にもまた、特定の〈他者〉が想定されている。それは、ある地域では「憑きもの筋」であったり、別の地域では被差別民であったり、民間の宗教者であったり、外国人であったりする。そうした人々は、家の神や職業、言語、肌の色などの差異などによって〈他者〉とされ、「外の人」とされる。そして、そうした人々に、鬼の子孫とか、害獣を祀る人々といったときには悪のしるしが、秘かにあるいは公然としるされるのである。こうしたしるしづけは、社会権力の中心にある人々が、社会権力の周辺にある人々のうえに対してのみ刻印するわけではない。たとえば、東北地方のザシキワラシは、金持ちの旧家に棲んでおり、それは一般の人々が彼らにとっての〈他者〉に与えたしるしであると考えられる。また、高知県東部の山間地帯のように複数の種類の「憑きもの筋」が共存する社会では、異なった「憑きもの筋」同士が互いに他者意識をもっている。

こうした人間の分類における民俗社会での最大の位相は、民俗社会（生活社会）の内側の人々と外側の人々との対立である。社会の外に住む人々は文字どおり〈他者〉であり、「よそ者」であり「異人」である。つまり、こうした人々が、ある民俗社会を訪れるとき、民俗社会の人々は、その人々を善なるイメージかもしくは悪なるイメージのいずれかのイメージ、あるいは両者の入り混じったイメージで把握する。そうした人々が社会に災厄

をもたらすと判断されたとき、彼らは「魔」や「妖怪」と同一視されるわけである。たとえば、弥三郎という凶賊が鬼や怨霊というものに変形されていったように、「異人」には「魔」や「妖怪」のイメージが賦与されるのである。D恐ろしい病に冒されている巡礼、恐ろしい呪力をもつと信じられた遊行する宗教者、こういった人々はしばしば「妖怪」であり、「魔」とみなされていた。それが、日本社会の歴史の暗い側面の一つを構成していたのであった。こうした人間分類は、近代になると日本人という次元でも現れ、「外人」といった《他者》も登場することになった。

（小松和彦『妖怪学新考　妖怪からみる日本人の心』一部改変）

問1　傍線部（ア）～（エ）の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 14

11

（ア）カクゼツ

① 彼はゲーム大会で賞品をカクトクした。
② 情報はネットでカクサンした。
③ エンカク操作でドローンを飛ばしていた。
④ あなたが合格するとカクシンしている。
⑤ 貧富のカクサが広がっている。

12

（イ）ジュンスイ

① 彼はキッスイの江戸っ子だった。
② 何度もスイコウを重ねて原稿が完成した。
③ エイコセイスイは世の習いである。
④ 名演奏にトウスイした。
⑤ みんなの協力がなかったらプロジェクトはカンスイできなかった。

13

（ウ）ソウショウ

① ソウタイ的に見ると良い結果だったと判断できる。
② 在庫をイッソウするためにバーゲンセールを行った。
③ 彼は新しい作品をソウサクした。
④ 彼の解決策が功をソウした。
⑤ これまで出た意見をソウカツした。

14

（エ）シンコク

① このバッグはシンシュク性に優れた素材でできている。
② 彼女はまさにシンソウの令嬢といえる。
③ 彼は自分の若さをカシンしている。
④ 隣国とシンミツな友好関係を築く。
⑤ 噂話のシンギをチェックする。

問2 傍線部A「異界」として最も不適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15

① 山
② 便所
③ 極楽浄土
④ 村はずれ
⑤ 炉辺

問3 傍線部B「赴く」の読みを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16

① おちつく
② いきつく
③ すみつく
④ おもむく
⑤ しりぞく

問4　a（　　）、b（　　）、c（　　）、d（　　）、e（　　）、f（　　）に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17

① a観念的、b地上的、c観念的、d地上的、e地上的、f観念的
② a観念的、b地上的、c地上的、d観念的、e地上的、f観念的
③ a地上的、b観念的、c地上的、d観念的、e観念的、f地上的
④ a地上的、b観念的、c観念的、d地上的、e地上的、f観念的
⑤ a観念的、b地上的、c地上的、d観念的、e観念的、f地上的

問5　本文中で論じられているC「対立」として不適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18

① 男・女
② この世界・彼方の世界
③ 地上的異界・観念的異界
④ 私・彼
⑤ 内の人・外の人

問6　傍線部D「恐ろしい病に冒されている巡礼、恐ろしい呪力をもつと信じられた遊行する宗教者」が「妖怪」や「魔」とみなされていた理由として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19

① 社会の秩序道徳を犯した邪悪な人だから
② 災厄をもたらす存在と判断されたから
③ 民俗社会の外側の人とみなされたから
④ 集落の外から災いをもたらす存在と思われたから
⑤ いろいろな土地を渡り歩いている人だから

問7　著者の主張として当てはまらないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20

① この世とは異なる空間が異界である。
② 昼は日常的な世界であっても夜になると異界になる。
③ 異界との境界は家の中にも存在する。
④ 差別された人々が妖怪と同一視されることもある。
⑤ 男よりも女の方が妖怪とみなされやすい特徴を有している。

2026年度　一般選抜Ⅱ期　国語「現代の国語」及び「言語文化（古文、漢文を除く。）」

問題番号	設問		解答番号	正解
第1問	問1	ア	1	4
		イ	2	3
		ウ	3	1
		エ	4	1
	問2		5	4
	問3		6	2
	問4		7	5
	問5		8	3
	問6		9	2
	問7		10	1
第2問	問1	ア	11	3
		イ	12	1
		ウ	13	5
		エ	14	2
	問2		15	5
	問3		16	4
	問4		17	2
	問5		18	3
	問6		19	4
	問7		20	1